

複数文化接触領域としての古代アフガニスタン¹⁾

稲葉 穰

1 中央アジアの宗教文化

人文学国際研究センターは最初の紹介にもあったとおり、京都大学人文科学研究所がイタリア国立東方学研究所、フランス国立極東学院と共同で設立したものであり、広く人文科学の分野において実質的な国際共同研究を実施するための場として構想されています。

しかし、一方で共同研究として何を扱うか、という個別具体的なテーマの設定は必要であり、とりあえず今後数年間は複数文化接触領域の歴史文化を研究することを方針としました。その具体的な研究プロジェクトの一つとして、中央アジアをフィールドとした宗教史研究をスタートさせています。

ご存じのとおり、中央アジア地域はかつては「西域研究」とか「東西交渉史研究」の対象となり、かつまたシルクロードという、いろんな意味で通俗化した言葉とそのイメージによって、なんとなく異文化交流の場であった、という理解は形成されているようです。しかしひとくちに中央アジアと言っても、それは現在の中国新疆から旧ソ連領中央アジア諸共和国にいたる広大な地域でありますし、我々が具体的な研究を行うためにはもう少し場所と時間を絞る必要があります。そこで取り上げようとしているのは、時代的には中国の唐の時代におおよそ対応する6世紀から9世紀、場所としては中央アジアの西端に位置する西トルキスタンからアフガニスタンにかけての地域です。そうやって地域を絞り込み、そこにおいて複数文化接触というのがどのような様相をもって生じたのかを検討しようとしているわけです。

2 アフガニスタンの地勢

2-1 文化接触の場

私が本日少しお話ししようとするのは後者、アフガニスタン地域についてであります。この地域は2001年以来何度もメディアに登場していますので、あらためて説明する必要もないかと思いますが、地図をご覧になっていただければおわかりのとおり、そこは歴史的に中央アジア、西アジア、南アジアという異なる文化世界が接触しているところでありました。その状況を生み出したのはこの地域の自然環境です。ヒマラヤ、カラコルムといった世界の屋根と呼ばれる高い山脈が西に延び、ヒンドークシュ山脈を経てイラン高原と接

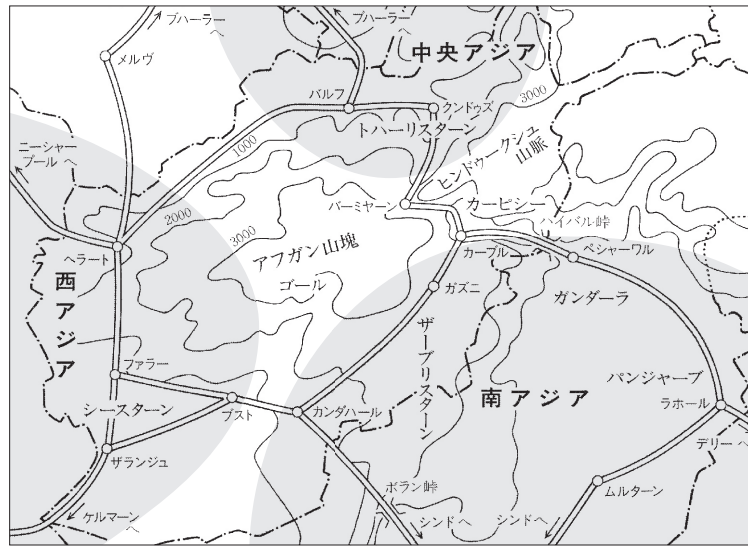


図1 アフガニスタンと幹線交通路（稲葉作図）

続するあたりにアフガニスタンは位置するのであります。中央に位置する山々をここでは仮に「アフガン山塊」と呼んでおきます。この険しく深い山々こそが、自然環境として、いま述べた三つの歴史文化世界を隔ててきたわけです（図1）。

2-2 辺境としてのアフガニスタン

さて、20年以上に及ぶ現在のアフガニスタンの混迷した状況を生み出したのは多様な民族と文化の混在であると言われておりますが、その状況もまたこの自然環境によって成立したものであります。険しい山と溪谷の中に散在する人々の有り様については、現在でも知られていない部分も多いのですが、それがいまから千数百年前となると、さらに状況は困難です。先ほども申しましたように、この地域で三つの大きな文化世界が接触しているわけですが、これは逆に言いますと、少なくとも前近代においてこの地域はどこの文化中心からみても辺境であった、ということを意味します。いきおい、様々な文献史料の中でもこの地域に関する情報は悲しいほどわずかしかなかった残っていません。18世紀以前、この地域の歴史地理について十分な情報を残してくれているのは、7世紀に旅をした玄奘三蔵と、16世紀初頭、中央アジアからインドに向かい、そこにおいてムガル朝をうちたてたバーブルが残した記録だけだと言ってよいでしょう。

3 アフガニスタン古代史研究の現況

3-1 考古学調査

しかしそのような文献史料の希薄さを補うものとして、前世紀にはアフガニスタン地域において、フランス、イタリア、日本によって精力的に考古学調査が行われました。その結果、多くの重要な文化遺産が発見され、驚異的な遺物が世界に伝えられたのです。我が人文科学研究所もかつて水野清一教授が組織した京都大学イラン・アフガニスタン・パキ

スタン学術調査隊（通称イアパ隊）や、それを受け継いだ京都大学中央アジア学術調査隊による長年の発掘調査の伝統と、それによって蓄積された多くのデータを所有しています。これらは人文科学国際研究センターのパートナーでもあり、ともに従来の研究資産を豊富に所有しているところのイタリア、フランス両国とも共同しつつ、今後、様々な形で公表し、世界的な情報ネットワークの上に搭載されねばならず、このことも我々の研究プロジェクトの大きな目的の一つであります。

3-2 遺跡・遺物の研究

ところが残念なことに、1979年のソ連軍の侵攻とそれに引き続く内戦はこれらの調査活動を途絶させてしまいます。バーミヤーン大仏をはじめ、多くの貴重な遺跡がこの間、破壊を被りました。しかしこのことは逆に発掘史料の精査のための時間を世界の研究者に与えることにもなりました。既知の文献史料を新発見の考古美術史料によって再照射し、過去の歴史を再構成するという作業が徐々にではありますが進められ、現在も継続しています。

たとえばバーミヤーン仏教コンプレックスは、残念ながら2001年の大仏爆破により大きなダメージを被りましたが、その後日本が中心となって行われている修復保存作業のお陰で、従来知られていなかったような様々なデータ、特に仏教コンプレックス建造に用いられた材料のカーボン・デイトーピングなどが進められ、重要なデータが得られています。我々の研究パートナーでもある、ウィーン大学のデボラ・クリンバーク＝ソルター（Deborah Klimburg-Salter）教授や、名古屋大学の宮治昭教授は、それらに基づいてこの仏教コンプレックスがイスラーム時代になっても存続していたことや、これらの建造がより北の、中央アジア方面との美術史的関連を持っているという点などを指摘し、新たな研究のサブジェクトが生み出されています（〔文化財研究所・名古屋大学博物館 2006〕を参照）。

また、内戦時に破壊されたカーブル博物館からは多くの重要な遺物が紛失しましたが、最近、それらのうちのいくつかが実は関係者の手で秘匿され、保管されていたことが明らかになりました。図2に見えるフォンドゥキスターン出土の見事な仏像も約20年ぶりに日の目を見ています。これらの遺物を中心に現在、各国の協力によってカーブル博物館の再建が推し進められていますが、その過程で新たに判明した興味深い事実なども少なからずあり、今後の進展が期待されるところです。

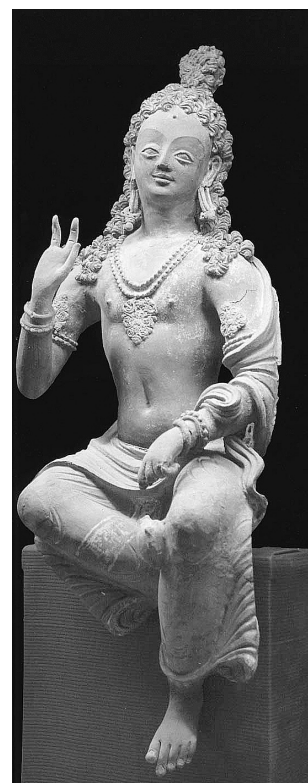


図2 フォンドゥキスターン出土菩薩像（〔樋口 2003〕カラー図版106より）

3-3 バクトリア語文書

しかし、ここ10年ほどの間、アフガニスタン古代史研究に最も大きなインパクトを与えたのは、いわゆるバクトリア語文献の出現です。皮肉なことに、これらの史料の発見にはアフガニスタンの長く悲惨な内戦が深く関わっています。その最たる例は、地雷除去作業の過程で存在が知られるようになったラバータク碑文であります。これはバクトリア語で書かれたクシャーン朝時代に遡る碑文で、クシャーン朝研究に大きな進展をもたらしました [Sims-Williams & Cribb 1995/1996]。しかしそれよりも重要なのは、アフガニスタン北部で発見されたいわゆるバクトリア語世俗文書であります。羊皮紙に書かれた数百点の文書は、内戦の難を逃れようとした農民が洞窟に逃げ込み、その奥で発見したという話になっていますが、いずれにせよロンドンでオークションにかかったこれら文書群はデーヴィッド・ハリリー氏の所有に帰し、ロンドン大学のニコラス・シムズ＝ウィリアムズ教授によって詳細な研究が行われておりますし、また京都大学文学研究科の吉田豊教授もこの分野において重要な貢献を行っておられます [Sims-Williams 2000]。時代的に西暦3世紀から8世紀という期間をカバーするこれらの文書からは、従来全く知られていなかったアフガニスタン北部の社会状況、宗教、文化に関して極めて重要な知見が得られています。その一部についてはまた後で触れようと思います。

3-4 フィールドワーク

一方、内戦の一応の終熄を受け、現地におけるフィールド・ワークも20年ぶりに再開されつつあります。先ほど触れたバーミヤーンの保存修復以外にも、フランス隊やイタリア隊が現地に赴き、いくつかの新しい発見ももたらされています。それら以外にも国連やNGOの活動の一環としてアフガニスタン各地に出かけていったヨーロッパ人や日本人が新しい発見をもたらしたりもしています。代表的なものは、バーミヤーンの西、ハザーラジャート北部で発見されたいくつかの遺跡と廃墟です。ハザーラジャートはアフガン山塊の東部を覆う地域ですが、その北部とは大要バンデ・アミールという湖から西に流れる同名の河の上流に位置します。最も大きなまちはヤカウラングと言い、その西、十数キロの場所で1996年、国連食料局の職員が仏教寺院址を発見しました。タンゲ・サフェーダクと呼ばれる村にほど近いこの遺跡からは寺院建立にかかわるバクトリア語の碑文が発見され、それは西暦724年にあたると考えられる紀年を持っています。残念ながら寺院の痕跡は現在ほとんど残っていないのですが、碑文はカーブル博物館に所蔵されています [Lee & Sims-Williams 2003]。

また最近では龍谷大学の調査隊がやはりこの地域に入り、いくつか興味深い遺跡や廃墟を発見しております。一つはタンゲ・サフェーダクからさらに河をくだったところ、ケリガンと呼ばれる村に近い場所にある遺跡で、仏教寺院の可能性もあるかと考えられています。また、そこからさらに下流にしばらく行くと、河岸段丘の上にそびえる城塞の廃墟があります。チェヘル・ボルジと呼ばれるこの砦の上層部はおそらくイスラーム時代のものですが、下層部にはもしかしたらクシャーン期に遡るかもしれない遺構が残っています。このハザーラジャート地域というのはおそらくアフガニスタンの中でも最も記録の少ない

地域の一つであり、そこに点在するこれらの遺跡が何を意味するのか、が今後考究されねばなりません。

3-5 フレームワークの必要性

以上、駆け足で現状を見てきましたが、これらの各分野の研究から得られた材料を組み合わせ、特に我々が問題としている6～9世紀のアフガニスタンおよび西トルキスタンの歴史を解明する、という作業が現在リアルタイムで世界中において進められているところです。2006年の3月にはウィーン大学において、この地域の考古学・美術史・貨幣学に関わる専門家によるワークショップが開催され、私も出席してきましたが、そこで感じたのは、誤解を招く言い方かもしれませんが、発掘資料や文書資料というのはそれ自体ではなかなか歴史的な文脈を持ち得ない、あるいは、大状況との接合の仕方がわからない場合が多い、ということです。

先ほども述べたように、従来の研究においても、これら各分野の研究成果が有機的に組み合わせられ、この地域の歴史というのが再構成されてきました。しかしながら多くの場合、実は implicit な形である種のフレームワークというか、a priori な歴史像というものが適用されています。もちろんそれらはある種の予測でもありますから、アフガニスタン研究だけでなく、あらゆる歴史研究に潜在的に認められるものでもあります。例としてあまり適当ではないかもしれませんが、例えば古くフランスのアルフレド・フーシェを中心とした研究者達が想定した、バクトリアの古代文化＝ヘレニズム文化の東漸が、北西インドにおいてガンダーラ仏教美術として結実する、という予測あるいは仮説があります。これは20世紀前半のフランスの考古学調査の大きな原動力の一つでした。実際にはこの仮説は、バクトリアとガンダーラを結ぶルート上にそのような文化東漸の痕跡が見いだされていないこと、およびガンダーラ仏の編年の進展により、二つの文化の間にかかなりの懸隔があるということが明らかになったことなどによって現在ではやや死に体となっていますが、今後の発見によってはいずれ復活する可能性がゼロというわけでもないところです。

3-6 マルクヴァルト、ギルシュマン、ゲブル

さて、そのような予測や仮説というのは、アフガニスタン史のみに限らず、伝統的に文献資料、特に年代記の記録に立脚してつくられてきています。しかしその場合にも、情報を積み重ねてボトムアップ的に理解を進める方向と、大状況の把握からトップダウン的に研究を行う方向とがあります。帰納と演繹と言い換えてもいいかもしれません。もちろん、どちらかみの方向性で研究を行うというのは現実的にはありえず、蒐集した情報から仮説を構築し、それによって情報を再照射するというフィードバック・ループを形成しつつ、実際の研究は行われてきています。

それでも、アフガニスタン古代史のように史料が希薄な分野においては、このようなフィードバック・ループすらも十分に構成するのが不可能な場合が多くあります。その場合、その間隙は従来、研究者の直観や経験、類推などによって埋められてきました。

そのような直観と創造力の翼を限界まで広げて、アフガニスタン古代史といいますが、

イスラーム以前の同地の歴史についてのアウトラインをはじめて総体的に描き出したのは、ドイツのヨーゼフ・マルクヴァルト (Joseph Marquart) であっただろうと思われます。この人は博覧強記を絵に描いたような学者だったようですが、同時期ロシアにはかのバルトリドがおり、随分とライバル心を燃やしていたという話もあります。彼はいくつかの著作、特に1901年に発表した *Ērānšahr* [Marquart 1901] という書物、これは同名のアルメニア語地理書の訳注だったのですが、この書物において、多くの斬新な見解とともに初期イスラーム時代に至るこの地域の歴史を描き出しました。彼の研究自体は現在ではあまり高く評価されていません。それは、マルクヴァルトの手法が簡単に言うと、既知の全ての資料は全て互いに関連し、整合的に解釈しうるものである、という姿勢に基づいていることによるものだと思います。彼の手にかかれば、漢文資料、アルメニア語資料、アラビア語資料に登場する、似たような固有名詞は全て同一のものということになっていきます。その際もちろん、音韻論など、言語学的に適正な手続きはあまり顧慮されません。かなり荒唐無稽な話も登場します。ただ、個人的に興味深いと思うのは、手法や過程はさておき、マルクヴァルトのアイディア自体は研究の進展とともに、実証されていく場合も多い、という点です。たとえば7世紀から9世紀にアフガニスタン東部を支配し、ムスリムの侵攻を阻んだのは現在のカーブルとガズニに拠点を置くテュルク系の王国でした。このテュルクがハラジュと呼ばれる者達であったことは近年の出土資料などから確かだろうと考えられているのですが、このことをはじめて指摘したのもマルクヴァルトでした。

マルクヴァルト以後、先にも触れたような各国による考古学調査が進み、情報が増え始めると、もはや古典的な、しかも極めて乏しい文献史料にのみ依拠するのではなく、出土資料を根本に据えて歴史を見直そうという動きが高まっていきます。特に20世紀前半におけるフランス考古学調査団の成果をふまえ1948年に発表された、ロマン・ギルシュマン (Roman Ghirshman) の研究 *Les Chionites-Hephtalites* [Ghirshman 1948] は前イスラーム期のこの地域の歴史理解に対して一つの画期をなす研究となりました。ギルシュマンは、5世紀以降中央アジアから北西インド、およびイラン東部にかけて活動した遊牧民を総称してキヨーン (ヒヨーン) と呼び、その一部は北西インドに侵入してグプタ朝を崩壊に導いた異民族フーナ、別の一部はヒンドークシュ山脈の北に根拠を置き、中央アジアからイランにまで影響を及ぼしたエフタル、さらに別の一派がヒンドークシュの南、ザーブリスターンに拠点を置き、長く同地を支配したのだ、と考えたのです。これは、マルクヴァルトの描いた歴史の大枠を踏襲しつつ、新たに得られた知見をうまく盛り込んだものとして、ヨーロッパの学界においてはその後大きな影響力を持つようになります。

その後、ロベルト・ゲブル (Robert Göbl) は1967年、貨幣学研究における金字塔とも呼ばれる *Dokumente zur Geschichte der iranischen Hunnen* [Göbl 1967] と名付けられた研究を発表しました。これはギルシュマンによってヒヨーンと名付けられた遊牧系集団の動向を貨幣史料から跡づけようとした大作ですが、やはり大きな枠組みとして、ヒンドークシュ山脈の南側および北西インドにおけるエフタル系集団の存在と活動を想定し、それを描写しようとしています。もちろん、ゲブルは長年の貨幣研究とその図像、銘文分析からこのような枠組みを提出したのですが、そこにマルクヴァルト、ギルシュマンらと

共通のバックグラウンドがあったことは否めないでしょう。ちなみにこの地域にかかわる貨幣の数はその後大きく増加しており、現在ウィーンにおいてゲブルの研究の増補改訂版をつくるプロジェクトが進行中です。

4 視点の設定：交通路

4-1 6～7世紀における交通路の変遷：桑山説

さて、以上のような20世紀、ヨーロッパにおける研究に共通するのは、実は中国史料の分析と利用が十分ではない、という点でした。前イスラーム期の中央アジアに関する漢籍史料について、中国学の専門家以外の人々は未だに前世紀初頭に発表されたエドゥアルド・シャヴァンヌの翻訳を利用することが多く、それをもとにした議論も見受けられます。この点を批判し、漢籍史料と考古学的史料を縦横に組み合わせてこの地域の歴史を再構築したのが、我々の研究所の桑山正進名誉教授です〔桑山 1990〕。桑山先生の研究について詳しく紹介するには時間が足りませんが、今挙げた二つの特徴に加えて、そこでは歴史地理的なアプローチがふんだんに用いられている点が特徴的です。要するに、文献史料にあらわれる場所や物が実際にどこにあってどうやったら到達できるのか、という検討を遺跡の分析から精密に行っているわけです。その過程で桑山先生は6世紀から7世紀、すなわちこの地域の歴史の主役がいわゆるエフタルから突厥へと移った時期に、南アジアと中央アジアを結ぶ道が大きく変化したという仮説を提出されました。この仮説は現在かなり多くの支持を受けているものですが、実は先に述べたマルクヴァルト以来の、中央アジアから北西インドにかけてのエフタル系勢力の遍在というフレームワークに修正を迫るものでもありました。この点に関しては現在でも議論があるところですが、この研究がアフガニスタン地域における交通路、という興味深いテーマに研究者達をひきつけているのは確かだと思います。

4-2 アフガニスタンを環状に巡る道：アレクサンドロス以降

最初に述べたように、現在のアフガニスタン地域はその中央部に峻険な山岳地帯を持ち、それを環状に巡るようにしてアフガン・ハイウェイと呼ばれる道路があります。この環状の道路はおそらく古代からの道とそれほどかわらない場所を通っていると考えられています。この交通路の存在がはじめて歴史的に記録されたのは紀元前4世紀、アレクサンドロスの遠征の時のことだったでしょう。アレクサンドロスはイラン高原を東に向かい、アリアナ、つまり現在のヘラート近辺、ドラングアナ（ザランジュのあたり？）、アラコシア（カンダハール近辺）、カウカソス（カーブル北方、ヒンドークシュ山脈南麓）、そしてバクトラ（バルフ近辺）をぐるっと巡って中央アジアに向かい、そこから再び南下してインドに入っています。今挙げた五つの場所は、このアフガニスタンを環状に巡る道がそれぞれ他の幹線ルートと接合する場所にあります。ヘラートから西へはいわゆるイラン北道が、ザランジュ方面からイラン南道が、またカンダハールから南東に向かうとインダス下流域からアラビア海へ、カーブル近辺から東へ向かえばインダス中流域からガンジス流域

へ、そしてバルフから北へ延びる道はソグディアナからさらに東方へと続きます。アレクサンドロス以後、インドへ進出したバクトリア王国、それに続いたサカ族もこの道を通った人々でありました。紀元後3世紀ほどの間中央アジアとインドにまたがる大帝國を築いたクシャーーン朝もまた同様です。

5 交通路史観の問題点

5-1 道と歴史を関連づける

このようにユーラシア大陸をつらぬく交通路の要衝であったアフガニスタン地域ですが、具体的にそこを誰が何を携えてどれくらいの頻度で通過したのか、という点については、残念ながら我々は情報を持っておりません。ただ、このような地勢的、交通路的観点から、この道の支配が相当な経済的利益を生み出したであろう、と推測できるのみです。交通路の結節点が交易の場となり、活発な市場を生み出すという点に関しては、おそらくあらためて議論する必要もないほどに我々は多くの事例を知っています。そうしてそのような市場においては、モノとともに多くの情報が交換され、その結果として新しい文化が生み出される、という点についてもあまり議論の余地無く、認めて良い推論なのだと思います。ただ、では実際に個別の場所で何がどう起こり、それが地域の歴史にどう反映されたのか、という点については、やはり我々は暗闇の中にいると言っていいでしょう。

現在我々が手にしている材料から、これらの詳細を知るのは極めて困難であります。将来情報が増加することを待つ、というのがおそらく最も賢明な方法なのでしょうが、しかし現在に生きる我々は我々でできる限りの手段をつくして問題の解明につとめる、ということとはなされてしかるべきだと思います。採りうる一つの方法は、これを比較史の文脈に持ち込む、というやり方でしょう。つまりアフガニスタンと共通する環境を持つ他の地域、時代の事例との比較を行うことで、逆に古代アフガニスタン史を考えるモデルを構築しようとする、というものです。これは口で言うのは簡単なのですが、実際には非常に難しい作業です。しかし、我々はこれまでの共同研究の積み重ねの中で、このようなアプローチを行うための条件を整えてきています。たとえばそれは、中央アジアの反対側に位置する、敦煌、トウルフアンにおける貴重な文献史料の研究の歴史であり、それに基づいた東西交流の様相の解析であります。人文学国際研究センターでの研究活動も、このような学術的資産を生かしながら、アフガニスタンおよび西トルキスタンの歴史研究に新たな光をあてられるのではないかと期待しています。

5-2 幹線ルートとは何か？

交通路に関して別の問題は、いわゆる幹線道路をどのように規定するか、という点です。先ほど申しましたように、アフガニスタンを環状に巡る道は、古代からその使用がおおよそ認められるものでありますが、それ以外の道はそれではあまり用いられなかったのか、というところではありません。たとえば、12～13世紀にアフガニスタンから北インドを征服したゴール朝という王朝はフィールーズクーフという都を持ちました。この都がどこに

あったのか、という点は論議があったのですが、現在では世界遺産にも指定されているジャームのミナレットがある、アフガニスタンでも有数の山岳地帯のただ中であつたと考えられています。イラン高原やインドに大軍をもって遠征した王朝の都が現在ではアクセスすら困難な山中にある、というのはいったい何を意味するのか、十分には説明できていません。またハザーラジャートの遺跡群の存在は、この険しい山中を通る交通路の存在とそこから生み出される一定の富の存在を示しているように見えますが、残念ながら文献資料からはこの道の使用について十分な証拠は見つかっていません（たとえば〔稲葉 1999〕を参照）。同じことは、後で触れるガズニの南西で発見されている多数の石窟寺院遺跡についても指摘できます。現在の幹線道路から山を隔てた山中にある多数の石窟群がどのような背景でつくられたのか、明確にはなっていません。

これらの問題は、結局、人々がどの道をどれほど頻繁に利用するかを選択する際の基準がどこにあるのかを我々が理解していない、ということにも起因しています。困難ではありますが、これらの遺跡がつくられた背景を、経済的問題、自然環境の問題、そして後でも触れますが精神環境的角度から、しかも何らかの判断基準を設定しながら考えることが必要になるでしょう。

5-3 歴史文化の総体の記述

もう一つ、交通路に関してはこれをもって歴史を考える際に留意せねばならない、いわば方法論の問題点が存在しているように思えます。それはすなわち、交通路を主眼としてある地域の歴史を考える場合に、その地域が人や物の通過場所としてのみ考察の対象となってしまうがちであり、そこに営まれた自立的歴史の流れが等閑視されてしまう、というものです。ここで私が念頭に置いているのは、かつて30年近く前にあつた、いわゆるシルクロード史観論争です。中国の資料とイスラーム世界の西方で書かれた資料に基づき、東西交渉、遠距離交易の場としての中央アジア史を描いた研究を、シルクロード史観として批判し、中央アジア現地で書かれた資料に基づきながら、中央アジアの歴史を規定したものを、東西交渉ではなく、遊牧民と定住民の間の南北関係であつたとしたのは、私の先生でもあつた京都大学文学部の間野英二名誉教授です〔間野 1977〕。その後、資料の増加と研究の多様化・深化はおおよそ間野先生が指摘した方向に我が国の中央アジア研究を導いたと言ってもいいかと思いますが、その一方で新たに発見された様々な文書史料や遺跡の研究に基づく、中央アジア交易を含む、東西関係のより精密かつ詳細な解明も進んでいます。現在極めてホットな話題となっている東方におけるソグド人の活動の歴史的研究などにおいても、この東西関係史研究の貴重な成果が十二分に生かされていると言えます。

ここで参考にすべきと私が考えるのは、ある現象のみを大きく取り上げ、特徴的に描き出そうとする手法の内包する危険性です。特定の特徴を切り口に歴史を考えるのは確かに有効な方法ではあるけれど、それだけでは、ある時代のある地域の歴史的営みを総体として描き出すことはできません。このことは、複数文化接触領域を考えようとする我々のプロジェクトにとっても重要な問題です。先に述べたような、アフガニスタンを環状に巡る道の抽出とそれに基づく歴史理解とは、とりあえずアフガニスタン史を読み解くための手

がかりを提供しはしますが、それだけでは不十分だということを認識せねばならないわけです。そのためにもできるだけ綿密な歴史状況を復元する試みが必要になるのですが、現時点では十分なデータが得られていないというのが辛いところです。

結局我々が取り得るのは、まず第一にオーソドックスな手法、言い換えれば入手できる限りのデータに基づいて帰納的に研究を積み上げ、一方、並行して様々な仮説を組み上げながら、データによって検証するというフィードバックをしっかりと行うことです。具体的には文献資料の精査によるフレームワークの設定と、新発現資料に基づくその検証を絶え間なく繰り返していくしかないということでしょう。ただし、既存の文献資料から抽出し、構築しうる枠組み自体は現在のままではそれほど大きな進展はないでしょうから、そこに別種の基準を持ち込むことができたなら新しい理解へとつながる可能性があります。そのための方法の一つが、先にも述べた他地域や時代との比較、です。もちろんこれも単に複数の事例を寄せ集めて比較するというのでは意味がなく、成果もあがりません。何を比較するのか、という点をまずはっきりとさせねばなりません。そのための切り口の一つが、先に述べた道の変遷、のような視点の設定になるのだと思います。

ややこしくなりましたが、我々が行うべき作業は、第一に従来の研究の把握、第二に文献資料に基づくフレームワークの措定、第三に種々の資料によるその検証。これらをふまえた上で、この地域の歴史を特徴づける性質と考えられるものを抽出し、それを他の事例との比較の文脈に投下する。そして、あわよくばそこから逆に当該地域の事例を照射する、ということです。

6 アフガニスタンの宗教

6-1 文化の主要な構成要素としての宗教

ところで、アフガニスタン地域は異なる文化世界の接触する場所だという前提でここまで話してきましたが、それでは文化を異ならせるもの、別の言い方をすれば、ある領域が単一の文化世界を形成する指標となるものとはいったい何なのでしょう。この問いへの答えは私ではなく、専門の文化人類学者が行うべきものだと思いますが、しかし少なくとも前近代において、そこで宗教と言語が大きな役割を果たしたと考えることはそう大きな間違いではないでしょう。

実際、アフガニスタン地域には歴史上、極めて多様な宗教が伝播し、そこからさらに他の地域へと伝わっていきました。それはもちろん、先に述べた幹線交通路を通じてのことでした。交通路が自然環境に主に基づいて成立したハードウェアだとすれば、宗教や思想はその上で動くソフトウェアだと言ってもいいかもしれません。ギリシア人の時代にはアポロン信仰やバックス＝ディオニソス信仰がこの地に到来したことが知られています。その後、東からは仏教や後にはヒンドゥー教が、西からはゾロアスター教がこの地に広がりました。特に後者についてはそもその起源がこの地域と密接な関わりを持っていると考えられています。その後も、キリスト教、マニ教などがこの地域に到来し、さらに東方へ向かって広がっていったことが知られています。単に伝わったのみならず、たとえばゾロ

アスター教や仏教、さらにはヒンドゥー教はアフガニスタン地域にある程度定着し、教団も営まれていたと考えられますが、それらの間での宗教接触や融合も見受けられます。特にポスト・クシャーン期から初期イスラーム時代（3世紀～9世紀）にかけては、そのような状況を示唆する証拠もいくつか発見されています。よく知られているのは、ガズニのタパ・サルダール仏教寺院址から発見されたドゥルガー像でしょう。これは明白に仏教寺院であった建物の中で、ヒンドゥーの神像が仏像と並んで安置され、崇拝されていたことを示しています [Taddei 1968]。これが実際にどういう状況を意味したのか、という点については議論の余地があるでしょう。仏像もドゥルガー像も人々にとって同じく崇拝対象であったのか、あるいは別種の人々のための崇拝対象であったけれど、同じ建物に置かれていたのか、でさえ意味するところは異なるからです。残念ながらそれを判断する材料はないのですが、このような部分の解釈の際にこそ、他の事例との比較が重要になるでしょう。

6-2 Žūn 神信仰

しかし、もっと興味深い信仰はまた別にあったことが知られています。かつて玄奘三蔵が「耨那天」と記録し、『隋書』に「順天神」と記録されている、ジューンあるいはズーンと呼ばれる神格への信仰です。

『大唐西域記』巻12には漕矩吒國すなわちザーブリスターンについて、

天祠は数十箇所、異道は雑居している。異道の中でも外道が多く、その徒はきわめて盛んで、耨那天につかえている。その天神は昔迦畢試国の阿路孫山より徙つてきて、此の国の南界の耨那呬羅山中に住み、威嚴をなし、福德を示し、また暴行悪行をしたりした。

とあります。

また、この神格はイスラーム時代初期にかかわるアラビア語史料では Zūr と呼ばれているものと同一だと考えられています。この神に関する記述はせいぜいこれくらいしかないのですが、しかしながら玄奘を参照するなら、この神殿は近隣諸地域からも信者を集める非常に盛んなものであったようです。

この神格の実態がどのようなものであったのか、という点についても先に名前を挙げた研究者達は様々に議論を重ねてきました。マルクヴァルトはこれをインドから伝わった太陽神信仰であると考え [Marquart 1901]、ジュゼッペ・トゥッチはこれをシヴァ教のローカルなヴァリエーションではないかとししました [Tucci 1963]。確かに、この時期アフガニスタン東部から北部にかけてはシヴァ教が広まっていたらしく、少なくともその造形的影響はアム河の北ソグド地方あたりにまで広がっていることが、桑山先生の研究や、ソグド地方ペンジケントの発掘調査などから明らかになってきています。一方、ギルシュマンはやはりこれを太陽神信仰と結びつけ、それが中央アジアに起源を持ち、ヒヨーンの民によってアフガニスタンに持ち込まれたものであると考えます [Ghirshman 1948]。そして現

在のパキスタンのムルタンにあって、極めて盛んであったことがアラビア語史料に記録されている太陽神殿であるとか、チグリス、ユーフラテスの河口近くに9世紀につくられ、インド人によって崇拝されていたという太陽神殿などをこれに結びつけようとしています。

一方ジャンロベルト・スカルチアは、この神格を、アフガニスタンとパキスタンの境界に位置するカーフィリスタン地方の神 Šarva と関連づけて考えます。この地域は言語的にも極めて古い要素を残していることで知られるのですが、実は19世紀までイスラームとは異なる独自の古い信仰を保持していたことでも重要な場所です。同じ文化を持つパキスタン側の住民がカラシュと呼ばれる人々です。ここで信仰されていたシャルヴァという神はスカルチアによればシヴァ神と関連を持ちますが、これと、南方スィースターン方面の、イランの英雄神話の登場人物たるジャムシード、ザッハークといった英雄神（ザッハークは悪魔の役回りですが）が結びついて、シュナー＝ジューン神となったというのが、スカルチアの見解です [Scarcia 1965]。

このように従来、特にヨーロッパの研究者達はこの神格について、シヴァ教系の信仰かあるいは太陽神信仰、さらにはそれらが融合した形態、とみなしてきました。ただこれらはバクトリア語文書が発見され、この信仰の広がりやさらに北にまで及んでいたことが明らかになる前の話、すなわち基本的にはアフガニスタンの東部から南部にかけての地域をこの信仰の舞台として考察されているものであるという点は留意しておくべきでしょう。

6-3 Žūn の遺跡？

この点にかかわる大きな問題は、この信仰に関連する可能性のある遺跡が今のところ知られていない、という点です。ただ、知られていない、というのは実は不正確な表現です。桑山先生は、このジューン神にかかわる遺跡を指摘しているからです。先に見たように玄奘は、カーピシーの葱嶺山というところにかつてとどまっていた、ジューン神を奉ずる教団が、その後到来した別の神格を信仰する集団に追われて、ザーブリスターンの南、穢那呬羅山＝シュナーヒーラ山に移ったという話を記録しています。このお話に適合する遺跡が、実は現在のカーブルの北にあるハイル・ハーナ神殿址であるというのが桑山先生の非常に重要な指摘であります。この神殿址はフランス調査隊によって発掘されたのですが、上下に二つの神殿址が重なり合っている独特の遺跡です。上層の神殿は下層の神殿を埋め立ててつくられています。この上層神殿からは太陽神であるスーリヤの像が二体発見されていますが、玄奘の記録を参照するなら、上層神殿を占有した新来の教団はこの神殿のある山を阿路篠（アルナ）山と名付けています。もちろんアルナとは、太陽神スーリヤの乗る馬車を操る御者の名前であり、新来の集団が太陽神信仰と深い関わりを持っていたことを示しますが、そこで発見されたスーリヤ神像はそのことを証するものであります [桑山 1979]。

このことを勘案すると、先ほど紹介したジューン神の性格に関する従来の説には大きな疑問符がつきます。第一にこれを太陽神信仰だと考えた場合、ハイル・ハーナで起きたのは、太陽神信仰が太陽神信仰によって追い出された、という事態であり、全くないわけではないでしょうが、かなり不思議な状況となります。第二にジューンがシヴァに関連する

神格だとした場合、シヴァ信仰が太陽神信仰によって追い出されたということになるのですが、ナポリ東洋大学のジョヴァンニ・ヴェラルディ教授は、当時の北西インドにおけるシヴァ教の隆盛を考えても、そんな事態はまずありえないのではないか、と述べています。

かくして我々は途方にくれるわけですが、手がかりはジューン神殿が移転した先、シュナーヒーラ山にあるのかもしれませんが。この山と寺院がいったいどこに当たるのか、かつてはいくつかの比定が試みられました。トゥッチはガズニの南西にある Šah Mār（蛇の王）というマウンドがそれに当たるのではないかと述べました。ここで言う「蛇」は先ほど少し名前を挙げたイランの英雄神話にあらわれる悪魔ザッハークの象徴だとされています [Tucci 1963]。一方、スカルチアは、ずっと南、現在のギリシクの北にある Zūr という村にある、Kāfir Qal'a というマウンドをその候補としています [Scarcia 1965]。ジューン神がアラビア語資料で Zūr と書かれること、カーフィルとは異教徒の意であること、などは、この地名を非常に示唆的なものに思わせます。しかしこれらの地域はその後の戦乱のゆえに、さらなる調査が行われることはなく、現在に至っております。いずれ平和が訪れてこれらの地が調査されるようになれば、新しい事実もわかってくるかもしれません。

6-4 Dokhtar-e Noširvān (Nigār)

ただ先に述べたバクトリア語文書は、この信仰にかかわる遺跡がより北の方にも見いだせる可能性を示唆するものでもあります。実は従来の調査によって知られているアフガニスタンの遺跡の中にも、その性格がよくわかっていないものがいくつかあります。特に注目すべきは、ヒンドークシュ山脈の北側、フルム河沿いにある二つの遺跡です。山脈に近いところにあるドフタレ・ノーシルヴァーン（ニガール）遺跡は、独特の壁画を残す興味深いものですが、これがいったいどんな信仰とかかわる遺跡なのかはまだ十分解明されていません。少なくとも仏教に関係するような図像はここでは同定されていませんが、一方で壁画の技法は近隣の仏教遺跡と共通する要素を持っています [Klimburg-Salter 1993]。マルクス・モーデ教授はこの壁画の中央の図像をアフラマズダ系の神と考え、ソグド美術の強い影響を示唆しています [Mode 1992]。この壁画の作成年代については、クリンバーク＝ソルター、モーデ両氏とも、8世紀初頭で一致しているようです。

ところで、ここに描かれた図像については、バクトリア語文書の出現により別の可能性も出てきました。この遺跡からやや北にいったところにルーイというまちがあります。古くはローブと呼ばれたこの地は、*khār* と呼ばれる王の都で、この王国はフルム河沿いの地域を南北に支配していたようです。そしてバクトリア語文書の多くは、このローブの王国の文書庫に由来するとされています。バクトリア語文書の中で648年に書かれたものの中に、Zhu(n)lad という名前が登場します。これは「ジューンによって与えられた (žūn dād)」に対応する名詞ですが、その背景にジューン神への信仰を見て取ることができます。一方、710年の年紀を持つ文書には Kamird と呼ばれる神が登場します。シムズ＝ウィリアムズ教授によればこれは、神に呼びかける一般的な敬称であり、その実態はジューンなのではないかと、言います。要するに、Kamird 神というのは「主なる神」とでも言

っているのと同じで、神の固有名はジューンではないか、というわけです。この文書の中では Kamird につかえる神官は $\kappa\eta\delta o$ と呼ばれており、これもシムズ＝ウィリアムズ教授によれば、『大唐西域記』巻12に、シュナー神を祀ると記されている「計多外道」の計多（中古音 *kiei ta）に符合するのだ、と言います [Sims-Williams 1997]。かりにそうだとすると、確かにこの文書に現れる Kamird はジューンと関連を持つのかもしれません。

かくしてローブのまちを中心として、この時期ジューン信仰が営まれたとすれば、ドフタレ・ノーシルワーンの図像もこの神を描いたものであり、それをつくったのはローブの王であった可能性が出てきます。もちろんこれは仮説の積み重ねにすぎませんが、もしそうであるなら、我々は、埋め立てられてほとんど手がかりを残していないハイル・ハーナ下層神殿以外にはじめて、図像の痕跡を持つジューン関連の遺跡を知るわけです。そしてもし、これが図像的にソグドの神の表現を手本にしたものだとなれば、そこにジューン神の新しい属性を認めることができるのかもしれません。

また、ルーイとの関連で言えば、ハイバクにはハザール・スムと呼ばれる石窟群があります。京都大学イアパ隊は1962年にここを調査しております。その名も「千の洞窟」というこの石窟群は概算で200以上の人工の窟があるのですが、その性格はよくわかっておりません。特定の宗教にかかわる痕跡を見いだせなかった水野清一先生は、これが住居等の址かもしれないとも述べておられますが、石窟のいくつかは立派なプラスターの装飾を持っていて、やはり何か特別の目的でつくられたものであった雰囲気を与えます [水野 1967]。ハザール・スムと同様、宗教施設に見えるけれども、その性格がよくわかっていないのは、1970年代にイタリア隊によって発見され、報告書が2004年に刊行された、ガズニの南西、ジャグリー地域に散在する多数の石窟群です [Verardi & Paparatti 2004]。こちらの石窟群に関しても、報告者であるジョヴァンニ・ヴェラルディ教授はこれを仏教遺跡だと見ていますが、石窟の形状を除き、それを明確に示唆する遺物は一つも発見され

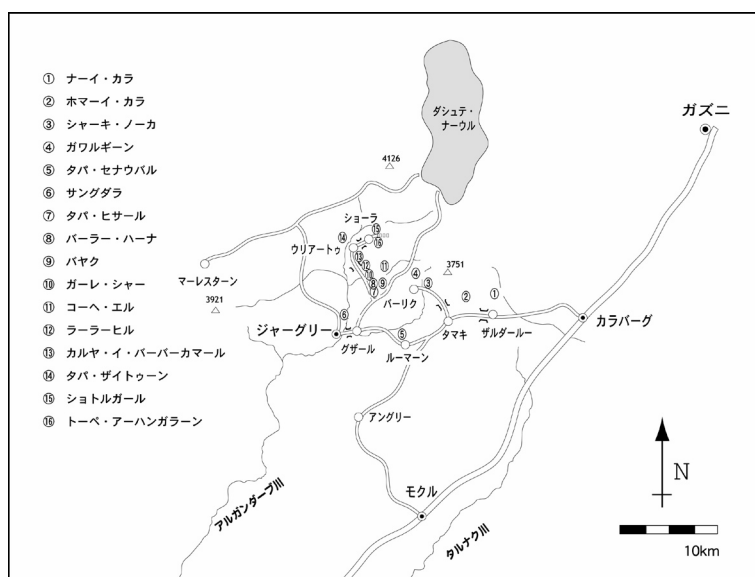


図3 ジャグリー＝カラバグ石窟群配置図 ([Taddei & Verardi 1984, Drawing 8] をもとに作図)

なかったようです。いわゆる幹線ルートからやや外れた地域にこれほど多数の石窟が穿たれた理由は、先ほども述べたように未だ明確にはなっていません。図3はこれらの石窟群の一番東に位置するナーイ・カラの場所を示しています。図4はそのナーイ・カラ石窟の石室内で、造作などはハザール・スムと共通しています。この場所は地域的に玄奘の言うザーブリスターンの南界であってもおかしくはなく、私もヴェラルディ教授に、ここがジューン神殿の場所であった可能性はないか、と尋ねたのですが、少なくとも考古学的にはそれを支持するようなものは一つもなかった、という返答をもらってしまいました。

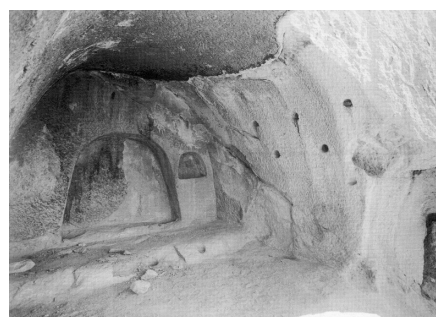


図4 ナーイ・カラ石窟内部 [Verardi & Paparatti 2004, Plate VIII-a]

残念ながら、これまで紹介してきた遺跡の多くは、現在でも治安のあまりよくない地域に位置しており、特に南東部に関しては、もうしばらくは新たな調査の見込みはありませんが、今後期待される新しい遺跡の発見と、既存の遺跡のうち、性格が不明なものの再検討によって、これらの遺跡の性格がある程度解明され、その結果として、ジューン神信仰にかかわる遺跡や遺物にもう少し迫ることができる日が遠からず来ることを私は期待しております。

7 複数文化接触領域の宗教研究

7-1 要素還元的あるいは分析的に研究するのか

ただし、もしジューン神信仰にかかわる遺跡が特定され、その有り様がわかったとして、それをどのように理解するかという点については、今ひとつ留意・考慮すべき問題があります。アフガニスタン地域の特性から考えて、この信仰あるいは神格は、従来の研究者の言うとおり、インドやイランの宗教思想に様々な影響を受けたものである可能性は高いのですが、そうやってその信仰の中にイラン的要素、インド的要素を指摘し、分割していくという方法の当否です。極めて単純に考えれば、ジューン信仰の中に、イラン的、インド的、あるいは中央アジア的要素を同定し、それらを取り除いて考えてみれば、残ったのがこの地域に特有の要素、ということになるわけですが、もちろんことはそう簡単にはいきません。そもそもアフガニスタンに特有の要素、というものがあるかどうか不確かなわけですし、長い歴史的過程を考慮するなら、いろんな要素を取り除いてしまえば、何も残らない可能性も高いと思われます。

7-2 総体としての複合文化、融合文化を記述するための方法は何か？

そうではなく、もしジューン神信仰が複合的あるいは融合的なものだとしても、それを総体として記述し、理解するための方法というのが必要なのだろうと思われます。複数文化接触領域について考えるとき、そこに見いだされる文化要素を、いわば要素還元的に分

析するという手法では、辺境は辺境のままであり、融合文化は単なる複数要素の足し算であるに過ぎなくなります。そうではないやり方とは何か。これは歴史研究や宗教研究の枠組みを超えて考察し、開拓していかなければならない問題なのでしょう。

先に名前を挙げたドフタレ・ノーシルヴァーンの壁画について、クリンバーク＝ソルター教授は

個々のモチーフは、ササン朝、ソグド、仏教といったそれぞれの文化的脈絡の中では明確に理解できるような意味を有しているのだが、ニガール（ドフタレ・ノーシルヴァーン）においてはそれらが組み合わされ、その結果、その意味するところが不明瞭となっている。[Klimburg-Salter 1993]

と述べていますが、これはまさにそのような問題を意識しての記述であるのだと思われます。

どうも散漫な話になってしまい恐縮ですが、今後の我々の研究方向の一つはこういったサブジェクトに向けられているのだ、という例示の意味でお話をいたしました。不明な点、物足りない点については今後の研究の進展をご期待いただきたいと思います。

注

- 1) 本稿は京都大学附属人文学国際研究センター開設記念シンポジウム「複数文化接触領域の人文学のために」（2006年6月29日 於京都大学人文科学研究所大会議室）において行った報告の講演録に、若干の修正を加え、また書誌情報を追加したものである。報告の際には三十数枚のスライドを使用した。ここではわずかの写真・図版を除き割愛した。

参考文献

- Ghirshman, R. 1948 *Les Chionites-Hephtalites*. Le Caire : Imprimerie de l'institut français d'archéologie orientale.
- Göbl, R. 1967 *Dokumente zur Geschichte der iranischen Hunnen*. 4 Vols., Wiesbaden : Otto Harrassowitz.
- Klimburg-Salter, D. 1993 Dokhtar-i-Noshirwān (Nigār) Reconsidered, *Muqarnas* 10 : 355-368.
- Lee, J. & N. Sims-Williams 2003 The Antiquities and Inscriptions of Tang-e Safedak, *Silk Road Art and Archaeology* 9 : 159-184.
- Marquart, J. 1901 *Ērānšahr nach der Geographie des Ps. Moses Xorenac'i*. Berlin : Weidmannsche Buchhandlung.
- Mode, M. 1992 The Great God of Dokhtar-e Noshirwān (Nigār), *East and West* 42 (2-4) : 473-483.
- Scarcia, G. 1965 Sulla religione di Zābul, *Annali dell'Istituto Universitario Orientale di Napoli* 15 : 119-165.
- Sims-Williams, N. & J. Cribb 1995/1996 A New Bactrian Inscription of Kanishka the Great, *Silk Road Art and Archaeology* 4 : 75-142.
- Sims-Williams, N. 1997 *New Light on Ancient Afghanistan*. London : SOAS, London University.
- Sims-Williams, N. 2000 *Bactrian Documents From Northern Afghanistan*. Oxford : Oxford University Press.
- Taddei, M. 1968 Tapa Sardār : First Preliminary Report, *East and West* 18(1-2) : 109-124.

- Taddei, M. & G. Verardi 1984 The Italian Archaeological Mission in Afghanistan: Brief Account of Excavation and Study, *Studi di storia dell'arte in memoria di Mario Rotili*. Napoli: Banca Sannitica.
- Tucci, G. 1963 Oriental Notes II: An Image of a Devi Discovered in Swat and Some Connected Problems, *East and West* 14(3-4):146-182.
- Verardi, G. & E. Paparatti 2004 *Buddhist Caves of Jāghūrī and Qarabāgh-e Ghazni, Afghanistan*. Rome: IsIAO.
- 稲葉稜 1999,「ゴール朝と11-12世紀のアフガニスタン」『西南アジア研究』51:16-42。
- 桑山正進 1979「葱嶺山と阿路孫山」『考古学論考——小林行雄博士古稀記念論文集』平凡社, pp. 1067-1086。
- 1990『カーピシー＝ガンダーラ史研究』京都大学人文科学研究所。
- 樋口隆康 2003『アフガニスタン』NHK 出版。
- 文化財研究所国際文化財保存修復協力センター・名古屋大学博物館 2006『バーミヤーン仏教壁画の編年』明石書店。
- 間野英二 1977『中央アジアの歴史』講談社。
- 水野清一（編）1967『ハザール・スムとフィール・ハーナ』京都大学。